

2026年2月15日 説教「招きに応じる人々」

ルカの福音書 14章 12～24節

先週は14章冒頭から学びました。安息日に水腫を患った人を癒された後に、一つのたとえ話がなされました。婚礼の披露宴に招かれた人々が上座を争っているという設定です。イエスはそこから「自分を低くする者は高くされる」とお教えくださいました。

1. 誰が招かれるのか (12～14節)

- ①招いてくれた人への話 (12) 「また、イエスは、自分を招いてくれた人にも、こう話された。『昼食や夕食のふるまいをするなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどを呼んではいけません。でないと、今度は彼らがあなたを招いて、お返しをすることになるからです。』」
- さて時は安息日です。別の話しが始まりました。それは、自分を食事に招いてくれた人に向けてのものでした。仮に何らかの食事の席に人を招こうとする時には、親しい人々は呼ばないほうが良いというものでした。友人、兄弟、親族、金持ちといった人々は、あなたがしたことに対して、お返しをきとすることになるからです、というのです。
- ②招くべき人々 (13) 「『祝宴を催す場合には、むしろ、貧しい者、からだの不自由な者、足のなえた者、盲人たちを招きなさい。』」
- だから宴を催す時には、人々から見向きもされない、貧しい人、身体に不自由な人、足の不自由な人、目が見えない人々を招きなさい、というのです。
- ③天来のお返しを受ける (14) 「『その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。義人の復活のときお返しを受けるからです。』」
- それは彼らが招かれたとしても、それに対してお返しする財力もないからで、それは招く者にとって幸いなことだというのです。なぜならば、そのように人に対して、主は天来のものとして、再臨される時に復活という最高のプレゼントをもって報いてくださるからだというのです。

2. 神の国で食事をする人 (15～19節)

- ①客の一人の感想 (15) 「イエスといっしょに食卓に着いていた客のひとりはこの話を聞いて、イエスに、『神の国で食事をする人は、何と幸いなことでしょう。』と言った。』」
- さてイエスの言葉を聞いて、食事のために着座している一人が感想を言いました。それは、主の食事に招かれることを、神の国で食事することと理解した人が、そのように導かれた人はなんと幸いなことがというものでした。
- ②盛大な宴会のたとえ話 (16～17) 「するとイエスはこう言われた。『ある人が盛大な宴会を催し、大ぜいの人を招いた。宴会の時刻になったのでしもべをやり、招いておいた人々に、『さあ、おいでください。もうすっかり、用意ができましたから』と言わせた。』」
- それに対して、イエスは再びたとえ話をされました。盛大な宴会を開いた人のことです。彼は大勢を招待しました。そして、宴会の時刻になった時にはしもべをやって、用意ができたので、再度の招きをしたのです。当時のオ

リエントの正式招待は二度繰り返されるのです(エステル 5;8)。それだけに、二度目の招待を断るのは大変な侮辱なのです。

- ③宴會出席を断る人々 (18~20) 「ところが、みな同じように断り始めた。最初の人はいこう言った。『畑を買ったので、どうしても見に出かけなければなりません。すみませんが、お断りさせていただきます。』また、もうひとりはいこう言った。『五くびきの牛を買ったので、それをためしに行くところです。すみませんが、お断りさせていただきます。』また、別の人がいこう言った。『結婚したので、行くことができません。』」

ここに出てくる人たちは一度目の招待の時には参加すると言っていたのでしよう。ところが、最初の人はい畑を買ったので見にいきたいという、事業優先で断りました。二番目の人はい五くびきの牛を買ったので試しに行くという新規のものを試すことを優先して断りました。三番目の人はい、結婚したので断りましたが、神の祝宴にうむしろ参加して、その結婚の祝福を願い、断るべきではなかったでしよう。

3. 宴に招かれた人々 (21~24 節)

- ①怒った主人の命令 (21) 「しもべは帰って、このことを主人に報告した。すると、おこった主人は、そのしもべに言った。『急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい者や、からだの不自由な者や、盲人や足のなえた人たちをここに連れて来なさい。』」

そこで、しもべは家に帰って、このことを主人に報告しました。すると主は怒りました。そして、しもべに言ったのです。町に出かけて行って、大通りであろうと、路地であろうと、またどんなに貧しい人であっても、からだに問題を抱える人でも、目に不自由がある人、足が動かせない人などに呼び掛けて、宴に参加させなさいと言ったのです。

- ②まだ席があります (22~23) 「しもべは言った。『ご主人さま。仰せのとおりにいたしました。でも、まだ席があります。』主人は言った。『街道や垣根のところに出かけて行って、この家がいっぱいになるように、無理にでも人々を連れて来なさい。』」

しもべは主人から命ぜられたようにしたのです。ですから、会場には人々が集められてきたのです。中には、身体に弱さを抱える人々も大勢いたことではしよう。しかし、それでもまだ席は空いていたのです。しもべはその旨を伝えました。すると主人はさらに、町の隅々まで出かけて行って、会場がいっぱいになるように、人々に無理を言っても集めて来なさいと命じたのです。

- ③無理にでも人々を連れて (24) 「言っておくが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は、ひとりもないのです。』」

この節はたとえ話の結論になるところでもあります。イエスは言われました。招待されたのに断った人々は、もし遅れて来たとしても、そこに入ることはできないと言われたのです。神の国の宴もそのようなものだと言われるのです。

《展開と結論》今朝は第一に見返りを求めずに生きる事を学びます。

『靴屋のマルチン』というお話があります。トルストイの短編です。妻と子を亡くしたマルチンは人生に絶望していましたが、神様に会いました。主が来られるとの約束をいただきました。ところが一日を過ごしても主は来られませんでした。すると夜に、今日わたしはお前のところに行ったのだよという声がありました。彼は雪かきの老人に優しくしました。赤ちゃんに抱える女性を助けました。リンゴを婦人から盗んだ少年をサポートしました。彼らはみな、主ご自身であったという短編です。これはマタイの福音書 25 章 40 節にある「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さな者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。」という御言葉に基づいた話です。今朝のイエス・キリストの最初のたとえ話には、13、14 節で、招いてもお返しができない人達を招きなさいと教えられています。つまり、見返りを期待しないでことをなす時に、天来の顧みがあることが示されているのです。私たちの歩みにもこの心、見返りを求めずに働きをするときに、主なる神は見えてくださって、別の方法で恵みをくださると覚えたいのです。

第二に、神の招きに応ずる人々について学んでいきましょう。

今朝の二つ目のたとえ話は、宴を設けて、多くの人を招いた人の話でした。これは、御国への招きについて語っておられることは間違いないでしよう。たとえ話のなかで、招きを断ってしまった人たちとは、いずれも自分中心、人間中心であり、イエス様からの招きを受けても、それを受け入れない人たちのことです。自分の力を過信し、神様を忘れ、自分が高くされることを求めて神様をないがしろにするのです。せっかく救い主イエス様が来てくださったのに受け入れず、その招きをも拒絶してしまうのです。そこで、このたとえ話では、町の隅っこに生きている貧しい者、からだの不自由な人たちが招かれてきたのです。彼らは、招かれたことを本当に喜び、感謝する人たちでした。これは、福音が異邦人を含めた、素直に神を信じる者たちに開かれていることを示しています。キリストの十字架と復活の福音を、パリサイ人や律法学者たちは受け入れませんでした。取税人ザアカイのような人は自分の罪を認めて悔い改め、主を信じました。

なぜ貧しい者、身体に弱さを持つ者、罪人とさげすまれる人が、かえって招かれたのでしよう。それは、彼らには誇りとするとともに、主の助けをいただくしかなく、自分の罪深さに悩む者たちであったからです。だからこそ、彼らは主の招きに気づくことができたのです。そしてそれに応じたのです。私たちがもし、「砕かれた、悔いた心」(詩篇 51:17)を持つならば、彼らと同じように、主がお招きくださるでしよう。それは、悪霊の支配を許さず、聖霊にゆだねる道でもあります。あのラオデキヤの教会に送られた言葉を思い出してください。「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて、戸をあけるなら、わたしは彼のところに入って、彼と共に食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」(黙示録 3 章 20 節)。このお招きに応じ、神の国の食事にあずかっていきましょう。